



**Data**

監督・脚本: S. S. ラージャマウ  
リ

出演: プラバース/ラーナー・ダッ  
グバーティ/アヌシュカ・シ  
エッティ/タマンナー/ラ  
ムヤ・クリシュナ/ナーサル  
/サティヤラージ/スッパ  
ラージュ

## 👁️👁️ みどころ

中国最大のヒット作『戦狼Ⅱ』（17年）が約1000億円なら、インドでの本作は約300億円！日本では邦画洋画を含めて1年間で約2000億円だから、その興行収入のデカさにビックリ！

なぜ、本作はそんなに大ヒットを？それは『十戒』（56年）、『ベン・ハー』（59年）、『スパルタクス』（60年）、『クレオパトラ』（63年）等と同じ、けた外れのスケール、アクション、ドラマカを観れば明らかだ。さらに、マヒシュマティ王国の王位継承をめぐる従兄弟間の確執は分かりやすく、一定のドロドロ感もかえて人間味に溢れ、悪くない。

頭の中を空っぽにして、親子三代にわたる壮大なドラマを楽しもう。



## ■ 2017年最大のヒット、中国はあれ！インドはこれ！ ■

2018年の『キネマ旬報3月下旬号』は、「2017年映画業界総決算」の号。その第2章「世界のヒットランキング&映画界事情」の「中国」では、「2017年は『ウルフ・オブ・ウォー』のひとり勝ちだった」と紹介し、①同作とランキング3位『羞羞的铁拳』の2本だけで中国映画全体の興行収入の約26%を稼ぐ爆発的ヒットを記録。②『ウルフ・オブ・ウォー』はアフリカが舞台のミリタリー・アクション。56億7875万元という、2位に倍以上の差をつける圧勝で、中国映画の歴代興収トップの記録も塗り替えた、と解説している。

他方、インドでは『バーフバリ 王の凱旋』の独り勝ちで色あせるボリウッド映画界」との見出しで、①「2017年のインド映画界は4月に公開された『バーフバリ 王の凱

旋』のメガヒットに沸いた」②「～王の凱旋」の国内興行記録約249億円は、ヒンディー語映画『ダンガル・きつとつよくなる』（16）が記録した興収の訳2・5倍で、当分抜かれることはないだろう、と解説している。新聞記事やパンフレットによると、『ウルフ・オブ・ウォーII』の興行収入は約1000億円、『バーフバリ』のそれは約300億円と考えられる。日本で公開される邦画と洋画の興行収入がそれぞれ約1000億円、合計約2000億円だから、その数字のすごさにびっくり。そんなインド映画の大坂公開を私は見逃していたが、今回シネ・リーブルの夜の部で一回だけ「2番手上映」されることを知り、さっそく映画館へ。

スクリーン上では前作『バーフバリ 伝説誕生』のあらすじが紹介された後、その第2部にあたる本作へ。なるほど、なるほど。いくつかの新聞記事で読んでいたが、なるほど、本作はそんな物語……。

## ■□登場人物は？テーマは？原作は？■□

インドの王国の名前や人物の名前はそもそも覚えにくいから、大変。しかし、本作は親子、従兄弟、恋人の確執を中心とした王国の権力争いの物語だから、第1～第3世代の別を縦軸とし、夫婦別、親子別、恋人別を横軸にして、登場人物の顔と名前を一致させる努力をすればわかりやすい。パンフには「王国人物相関図」があるから、その購入は不可欠だ。また、本作は当初から「シリーズもの」として企画されたものではなく、前作は前作として完結しているから、本作を作るについては、その「つなぎ」が大変。しかして、本作のパンフレットには「あらすじ」があるので、これも必読だ。

本作導入部では、蛮族カーラケーヤの族長にとどめを刺したのは従兄のバララデーヴァ（ラーナー・ダッグパーティ）だったにもかかわらず、蛮族との戦いに真に貢献したのは従弟のアムレンドラ・バーフバリ（プラバース）であると判断した、バララデーヴァの母親で国母になっているシヴァガミ（ラムヤ・クリシュナ）が、次期国王をバララデーヴァではなくアムレンドラ・バーフバリに指名し、バララデーヴァを軍の総司令官に任命するところからスタートする。そんな決定を、シヴァガミの夫かつバララデーヴァの父親でありながら、左腕の障害のため王位につけなかったビッジヤラデーヴァ（ナーサル）が苦々しく思ったのは当然。『十戒』では、弟のモーゼ（チャールトン・ヘストン）は兄のラメセス（ユル・プリンナー）が次期エジプト王になることを前提としたうえで、父親と兄に忠誠を尽くしていたが、本作はそれとは大違い。

従兄弟の間での王位継承をめぐる権力闘争はどこにでもよくある話だが、中国の『三国志』に当たるインドの叙事詩『マハーバーラタ』は、「ハースティナプラ」という架空の王国の王位継承問題を縦糸に語られているようだ。したがってそれを下敷きにして作られた本作も、それは全く同じらしい。

## ■□■スケール、アクション、そしてドラマカはケタ外れ！■□■

前作は約31億円、本作は約42.5億円、2作合計の製作費は約73.5億円だそうだ。私は中・高校時代に観た『十戒』（56年）、『ベン・ハー』（59年）、『スパルタクス』（60年）、『キング・オブ・キングス』（61年）、『アラビアのロレンス』（62年）、『クレオパトラ』（63年）、等の「歴史もの」、「キリストもの」、「スペクタクルもの」が大好きだった。しかし、近時のハリウッド大作の1つである『ロード・オブ・ザ・リング』シリーズは少しずつ飽きてきたし、中国でひと昔前に大ヒットした『HERO』（02年）や『LOVERS』（04年）、また近時の『レッドクリフPart I（赤壁）』（08年）（『シネマルーム21』34頁、『シネマルーム34』73頁参照）、『レッドクリフPart II（赤壁 決戦天下）』（『シネマルーム22』178頁、『シネマルーム34』79頁参照）や『グレートウォール』（16年）（『シネマルーム40』52頁参照）等も少し飽きてきた。

他方、インドでは、かつては「歌って、踊ってボリウッド」が主流だったが、近時は、一方では『チェイス！』（13年）（『シネマルーム35』120頁参照）等のド派手なアクションものが、他方では『マダム・イン・ニューヨーク』（12年）（『シネマルーム33』38頁参照）、『めぐり逢わせのお弁当』（13年）（『シネマルーム33』45頁参照）、『女神は二度微笑む』（12年）（『シネマルーム35』127頁参照）等のストーリー性を重視した良質な作品も登場し、バラエティに富んできた。そんな矢先に、インドで本作のような世界的に驚くべき超ど級の超エンタメ作品が登場！

『十戒』では、モーゼの目の前で真っ2つに割れる海のシーンが最大のスペクタクルだったが、同作では導入部でのモーゼの手による新都市建設の高度の技術など、古代エジプト文明の技術レベルの高さも光っていた。本作に描かれるマヒシュマティ王国がいつの時代かはよくわからないが、王宮の立派さや戴冠式のスペクタクルシーンを観ていると、『クレオパトラ』で見たシーザーの凱旋式のスペクタクルシーンとそっくりだ。また、『レッドクリフ』では、魏の曹操の水軍の威容ぶりが光っていたが、本作ではパララデーヴァが乗る戦車や、花嫁のデーヴァセーナ（アヌシュカ・シェッティ）と一緒にマヒシュマティ王国へ戻る旅で乗る白鳥の舟など、独創的かつファンタジー色に溢れ、しかも高度な技術に裏付けされた大道具小道具の数々にビックリ！さらに、チラシには2人が同時に3本の矢を放つシーンの写真や、巨大なインド象の鼻を使った巨大な弓矢の写真が写っている。それらを含めて本作のスケールとアクションにビックリ。さらに、1月26日に見た『空海 KŪ-KAI 美しき王妃の謎』（17年）で陳凱歌監督が見せたドラマはファンタジー色が強く、ストーリー展開はかなりマンガ的だったが、本作はケタ外れのドラマカにもビックリ！

本作のチラシには「大叙事詩『マハーバーラタ』から生まれた、映画史上空前の吉祥開運ムービー！」「数奇な運命に導かれた伝説の戦士バーフバリ」「三代に渡る壮大なドラマ

が、想像を遙かに越えた興奮と感動のフィナーレを迎える！」と書かれているが、その通りだ。まさに、スケール、アクション、そしてドラマ力はケタ外れ！

## ■□■人間ドラマは往々にして大誤解から。それにしても！■□■

マヒシュマティ王国の国母シヴァガミの執政ぶりを見ていると、エジプトの女王クレオパトラ、邪馬台国の女王卑弥呼と同じように威厳に満ちあふれているうえ、公平性に十分留意しているから、安定感がある。また、当時は側近の数も多くないから、現在のトランプ大統領のように、それをとっかえひっかえする必要もないようだ。しかし、本作中盤では、王位継承の最大のポイントとなるバーフバリとバララデーヴァという2人の従兄弟の「嫁取り」をめぐる大誤解が生じてくるから、それに注目！

すなわち、クンタラ王国の王女であるデーヴァセーナと恋仲になり、その結婚を国母から許されたとバーフバリが誤解したばかりか、バララデーヴァにはデーヴァセーナとの結婚が国母によって決定されていた、というストーリー展開になっていくから、アレレ・・・？バーフバリは国母であるシヴァガミには「絶対の忠誠」を誓っていたし、デーヴァセーナには「絶対の愛」を誓っていたから、あちらを立てればこちらが立たず、の窮地に追い込まれることに・・・。もちろん、これを画策したのはデーヴァセーナの肖像画の美しさに横恋慕したバララデーヴァだが、これほどうまくシヴァガミを騙せるとは！やっぱり、母親にしてみれば自分の子供バララデーヴァはもちろん、甥のバーフバリもかわいいわけだ。窮地に陥ったのはバーフバリだけではなくシヴァガミも同じだが、そこでシヴァガミが下した決断は、バララデーヴァを新たな国王とし、バーフバリを軍の総司令官に「格下げ”するもの。これは3月29日付の朝日新聞で、貴乃花親方を「委員」から最も低い階級「年寄り」へ2階級降格させる処分と同じでぎりぎり妥当なもの。その後しばらくバーフバリは軍の総司令官として、母王シヴァガミにも国王バララデーヴァにも忠誠を尽くしていたが、バララデーヴァの策謀はとどまることを知らず、ある日ついにバーフバリとデーヴァセーナは王宮を追われ、平民として暮らさざるを得なくなることに・・・。

ここらのストーリー展開は『十戒』とよく似ているが、『十戒』と違うのは宗教色が全くなく、従兄弟の確執と権力争いにテーマが絞られていること。そのため、多少のドロドロ感はあるものの、それを含めたストーリーは分かりやすく納得感がある。

## ■□■当面の勝者は？真の決着は25年後に！■□■

本作では、国母とバーフバリに忠誠を尽くす奴隷のカッタツパ（サティヤラージ）が大きな役割を果たすので、それに注目！彼の最初の役割は、国母から命じられてバーフバリが“黄門サマ”のように自分が統治する領土に見回りに行く時の護衛役だ。カッタツパはその任務は立派に果たしたが、バーフバリがクンタラ王国の王女デーヴァセーナと恋に落ちたことについての国母への連絡が不十分だったことから、前述の大誤解につながること

になった。したがって、それが彼の第1の失敗だ。

彼の第2の、そして最大の失敗は、バララデーヴァから命じられた不当なバーフバリの暗殺命令を正当なものだと騙されて実行したこと。それも、平民となったバーフバリがマヒシュマティ王国のために蛮族カーラケーヤと命をかけて戦っている中、バーフバリの信頼を裏切る形でバーフバリを殺してしまったのだから、大失敗だ。前作と本作を繋ぐ最大のポイントはその暗殺シーンとなるが、その説得力は？また、その必然性は？さらに、主人公であるバーフバリが本当に死んでしまうと、本作の結末のつけ方は？まさか、あの時にバーフバリは死んでいなかった、というあっと驚く結末が用意されているの？そう考えていると、“当面の勝者”はバララデーヴァとされるものの、本作の決着はそれから25年後になる。つまり、そこでの主人公はバーフバリの一人息子である前作のシヴドゥ、本作のマヘンドラ・バーフバリになるわけだ。なるほど、なるほど……。

アマレンドラ・バーフバリとマヘンドラ・バーフバリの2役を演じるプラバースは、本作のために筋肉隆々の身体に肉体改造をしたらしい。そして、それは本作最後のクライマックス・シーンでバーフバリと肉弾対決するバララデーヴァも同じだ。その対決のシーンで絢爛と輝くバララデーヴァの黄金の像は、まるでレーニン像やスターリン像そして金日成像のようだが、それを崩壊させながらたくましい肉体同士がぶつかりあう本作クライマックスに注目！もちろんここでは勝者も結末もわかっているが、それでもたっぷり楽しめることは間違いない。これにて、私を含めほぼ満席の観客は大満足！

2018（平成30）年3月30日記